

成人期のアイデンティティ発達における 「関係性」の側面について

—理論的展望と生活レベルに見られる2, 3の問題—

岡本 祐子

(1995年9月11日受理)

A Review and Some Considerations on the Aspects of "Relatedness"
in Adult Identity Development

Yuko Okamoto

This paper is a review of psychological studies on "relatedness" and some considerations on the importance of relatedness for identity development in adulthood.

The aspect of relatedness of the self has been considered less important for human development, in comparison with the aspect of separation-individuation of the self. However, according to the recent studies, it is suggested that both of these aspects are equally important for identity development theoretically and empirically. Besides, in daily life situations, a lot of conflicts between personal identity and related-identity are experienced especially by women. The importance and necessity to establish the total vision is suggested for integration of achievement of personal identity and support to significant others' identity.

Key words : identity development, relatedness, related-identity, adulthood.

1. 問題および目的

1990年代は「共生の時代」といわれるように、今日では「個の確立」と「個人の自由」を越えて、「共生」の思想が現代の時代精神を代表するものになりつつある。そこには、人的、物的両面の資源の有限性が見えてきた現代社会にあって、もはや個人の福利だけを追求していたのでは、個人そのものも社会も維持できなくなってきたという認識がある。具体的には、地球資源の有限性、水やエネルギー問題、環境破壊等のいわゆる環境問題や、少子化、高齢化社会の到来にともない、子供を産み育て、高齢者を看取るという課題は女性や専業主婦だけの問題ではなく、社会全体の必修であるという問題意識などである。

特に後者の問題、つまりライフサイクルを通して、家族をはじめとする他者の発達をいかに援助しつつ、自分自身も自己実現を達成していくかという問題は、心理学や家政学の領域においてもきわめて重要な現実

的課題である。家族にあっては個人を犠牲にする「和」やもたれ合いではなく、可能な限り自立した者同士の共生関係を構築していく必要がある。しかしながら、成人期の発達に関する研究においては、これまでこの関係性の発達と実践の側面はあまり重視されてこなかったように思われる。ライフサイクルにおける関係性の発達と実践に関する問題は、多様な領域と次元にわたる複雑な課題を内包しているため、少なくとも、研究から得られた知見にもとづいた理論的展望と、現実の生活場面で見られる諸問題の分析を通して考えられる実際の問題の2つの次元で考察することが必要であろう。

本研究は、個の達成とともに成熟した共生関係を構築していくための基礎研究として、①心理学研究から得られた関係性の発達に関する知見を展望し、アイデンティティ発達における関係性の意味について考察するとともに、②生活レベルにおいて関係性の達成が阻害される今日の状況について検討した。さらに、③関

係性の発達にとって重要な鍵概念の一つであると思われる「世話」のもつ意義について考察し、成熟した共生関係の構築のために重要であると考えられる、個の確立と関係性の達成の両者を統合するヴィジョンについて論じた。

2. 心理学における「関係性」発達の研究

人間は、それぞれ固有の世界をもつ個的存在でありながら、同時に他者との関わりなしには生きていくことのできない関係的存在であることは、改めて述べるまでもなく人間の本質である。しかし、はじめに述べたように、個人の発達にとって関係的存在の側面のもつ意義は、これまで心理学研究においてはあまり重要視されてこなかったように思われる。

その背景のひとつには、今世紀後半の心理学の主要な関心と中心的研究課題が、個の達成、しかも西洋的、男性的な枠組における自我の発達であったことがあげられる。個の確立と個人の自由は、今世紀後半の時代精神の軸を担ってきたと思われるが、心理学の世界においても、分離-個体化を軸にした西洋的、男性的な自我の研究が重視され、それが我が国にもそのまま移入される傾向にあった。また、西欧においてもそうであったように、男性の研究者による男性をモデルにした発達研究が中心であったこともその一因であろう。そういう潮流の中で、「他者との関係性」の問題はともすれば、自我の発達の単なる一部分、あるいは背景的要因としてとらえられる傾向があった。もしくは後述するように、関係性の概念は「女性性」、「女性的要因」に類似した特質をもっているために、重視されることが少なかったとも考えられる。

(1) 「関係性」の概念

人間は個的存在であるとともに、関係的存在でもあるという基本的2面性については、古くはJung (1951), Parsons (1955), Bakan (1966) などによって論じられている。Jungは、自己の基本的2面性の象徴を男性性、女性性の中に見出し、1人の人間の中での両面の統合の可能性と必要性について述べている。また、人間の基本的様態に対してParsons(1955)は、「道具性 (instrumentality)」と「表出性 (expressiveness)」, Bakan (1966)は、「個体維持機能 (agency)」と「(親交) 関係維持機能 (communion)」という概念を用いて説明している。「道具性」は、家族システムの要求と家族外の世界とを調整する働きで、目標指向性が優先して人の反応にはあまりかわり合わないのを

特徴とするのに対して、「表出性」は家族内の相互関係や情緒的要求を調整・維持していく働きを示し、人の反応への敏感さと人間関係への関心の特徴とする。また、「個体維持機能」は、自己保護や自己拡張、自己主張の諸活動、支配、そして分化や他者からの分離といった機能様式を示す。そして「関係維持機能」は、無私、人間関係、人との融和や触れ合い、協同、開放性といったものにかかわる機能様式を示している(斎藤, 1990)。これらの概念は、しばしば男性性、女性性の概念として分類されることが多く、男性性は「道具性」と「個体維持機能」、女性性は「表出性」と「関係維持機能」が合わさったものとして理解されてきた。

また最近の性役割に関する研究では、Bem (1974)をはじめとして、男性性と女性性を相入れない2極対立的な枠組ではなく、1人の人間の中に両者とも存在するという両性具有性の概念が提唱されている。さらに、Gilligan (1979)は、このような人間の存在様式の2面性を「幼少時のみならず人間の一生を通じ繰り返し、対位的に現れる「愛着と分離」としてとらえ、アイデンティティの定義にも、各々に対応する2つのモード、すなわち人間関係の中で関わりそのものとして定義される「関係的自己」(Connected-Self)のモードと、関係から分離し他者とは隔たったものとして定義される「分離した自己」(Separated-Self)のモードがあるとした。彼女によれば、両面は共に人間の本質であり、同等の価値をもつもの、究極的には統合に向かうものであり、男女の違いはその発達の様相の違いとしてとらえられている。

(2) ライフサイクルにおける「他者との関係性」の発達

ライフサイクルを通して見た時、他者との関係性はどのように発達していくのであろうか。また関係性の発達とは、個人の成長・発達にどのような意味をもつと考えられてきたのであろうか。

1) 乳幼児期・児童期

乳幼児期・幼児期など発達早期については、男児、女児とも他者(特に母親をはじめとする養育者、家族)とのよい関係性を体験することは、人格発達の基盤ととらえられてきた。Erikson (1950)は、精神分析的個体発達分化の図式 Epigenetic Scheme において、その第I段階 乳児期の心理・社会的課題は「基本的信頼感の獲得」であるとし、これは世話してくれる母親(と母親を通じての世界)に対する信頼感と、自己の存在そのものに対する信頼感を意味すると述べている。

またMahler (1975)は、出生から生後6カ月頃までを「正常な共生期¹⁾」(Normal Symbiotic Period)と

し、発達のごく早期のこの時期に母子一体感、つまり安定した母子の共生関係¹⁾を体験することが、次にづく「分離-個体化」の達成の基盤となるとしている。さらに Bowlby (1969) による一連の愛着理論も、後の研究者によっていくつかの批判や修正が行われているとはいえ、乳幼児の母親との愛着関係が、後の発達に決定的な意味をもつことを実証したものである。

また、社会心理学の領域における愛他行動の研究も、関係性発達の視点から見ると示唆的である。生後1~2歳頃からすでに、子供には愛他行動らしきものが見られはじめ、思春期頃までに愛他行動の行動・認知・情緒の各側面は、いくつかの特徴的な段階を経て発達する。しかし、愛他行動は、質的にも年齢とともに発達するとは限らず、愛他動機が活性化されているかどうかにかかっているといわれている(松井, 1992)。

このように乳幼児期の関係性研究は、母子関係に焦点化したものが圧倒的に多いが、そのいずれも関係性を後の人格発達、自我の発達の基盤としてとらえていることは共通している。

2) 青年期・成人初期

さて、関係性の発達と個としての発達が分岐し、その関連性や性差が俄かに重要視されてくるのが青年期である。この問題の多くは、アイデンティティ形成との関連で論じられることが多い。

Erikson (1950) の提唱したアイデンティティ理論によれば、青年は、それまでの成長過程の中で出会った重要な他者との同一化を主体的に見直し、さまざまな自己探求や模索を経て、独自の自己のあり方、生き方を主体的に選択する。青年期のアイデンティティ確立には、この主体的に選択した自己のあり方が、他者や社会から受け入れられること、つまり社会の中に自己の位置が与えられることはもちろん重要であるが、それは独自の主体的自己が確立されていることが前提である。Blos (1967) は、青年期を第2の分離-個体化期と呼び、青年が親からの心理的自立をとげ、成人に達するこのプロセスの中に、乳幼児期の分離-個体化プロセス (Mahler, 1975) と類似した特質を見出している。

また、成人初期における重要な関係性の概念に、「親密性 (intimacy)」 (Erikson, 1950) がある。親密性とは、特定の異性と深く長い親密な関係を維持する力を意味し、これは分化した強固な自己感覚を基盤に達成される他者との再融合関係を示している。周知のように Erikson は、親密性は青年期のアイデンティティ確立の後に到来する成人初期の心理・社会的課題であるとしている。

それに対して、このような他者から分離した個とし

ての自己確立を強調した青年期のアイデンティティ理論の多くは、男性をモデルにしたものであり、女性には必ずしもあてはまらないことが指摘されている。Chodorow (1978) は、女性は自分自身を人とつながっているものとして定義し経験するところ、つまり世界と結びあっているという基本的な自己感覚をもつ点において、男性の分離した自己感覚とは異なる特徴をもつと述べている。Miller (1976) もまた、女性の自己感覚が「親しむこと (affiliations)」や「関係性 (relatedness)」の世界を作り出し、維持できることを通して固められていくということから、「関係自己 (relational self)」が女性の人格発達の中心をなしていくと述べている(斎藤, 1990)。この男女の相違は、乳幼児の世話が普遍的に女性の手によって行われていることに由来し、根本的に、母親と娘との結びつき、相互愛着関係や原初の相互同一化関係という基盤がもたらすものと理解されている。

さらに、女性のアイデンティティ形成は男性とは異なる特質やプロセスをもつことが、Josselson (1973), O'Connell (1976), Hodgson & Fisher (1979) ら、女性のアイデンティティ研究者によって指摘されている。これらの実証的研究によって得られた主要な知見は、次のようなものである。

①男性の場合は、アイデンティティ確立の後に親密性のテーマが問題となるのに対して、女性の場合は両者が並行して進行する。つまり女性は、親密な関係をもつことでアイデンティティがより確かなものとなる (Josselson, 1973)。

②女性の場合は、職業やイデオロギーの領域での自己探求や主体的選択という男性型経路によるアイデンティティ形成のみでなく、性や結婚など関係性に直接かかわる領域での模索や決断という女性型経路、あるいは両方の領域を通じての両性型経路のいずれによっても、アイデンティティ形成が行われる (Hodgson & Fisher, 1979)。

③女性の場合は、伝統型(結婚、出産後は専業主婦になるタイプ)、新伝統型(結婚、出産後は専業主婦になるが、子育て後再び職業をもつタイプ)、非伝統型(結婚、出産にかかわらず職業をもちつづけるタイプ) というライフスタイルによって、ライフサイクルの各時期におけるアイデンティティの感覚が異なっている (O'Connell, 1976)。

これらの研究を総合すると、青年期以降のアイデンティティ発達にとって、他者との関係性は、個の確立と同様の重要な意味をもっている。特に女性においては、乳児期という発達早期にまで由来する根源的な意味を内包しているようである。しかしその一方で、す

すべての女性が関係性を中核においてアイデンティティ形成を行うわけではなく、ライフスタイルなど個人内外の要因によって、男性と同様のアイデンティティ形成プロセスをたどる女性もまた多い。この女性の発達プロセスの多様性に関する問題は、今後の重要な課題である。

またこれまで、Eriksonをはじめとするアイデンティティ理論にもとづいて個の確立を強調して理解されてきた男性のアイデンティティ発達は、はたして本当に成熟したアイデンティティ達成といえるのかという問題も改めて問い直す必要がある。最近まで、アイデンティティ形成と親密性の獲得の問題は、男性にとっては深刻な葛藤をひきおこす問題としてはとらえられていなかった。それは1つには、社会的に見て男性にとっては、アイデンティティの確立と男性役割の取得・男性アイデンティティの獲得は、矛盾なく進展するものであること、第2に、発達的に見て、青年期のアイデンティティ形成、成人初期の親密性の獲得、成人期の世代性の達成という心理・社会的課題の流れは、一般の健康な男性にとっては非常に明瞭なプロセスとしてとらえられてきたからである。

男性が成熟した親密性を獲得するためには、男性役割の確立と親からの自立が不可欠の要件である。しかし、今日の社会では、この2つの要件が必ずしもうまく達成されていないことが指摘されている。我が国においては、現在、男性の平均初婚年齢は次第に上昇しつつあり、男性の未婚率もまた年々、増加しつつある。このことは、我が国の青年期・成人初期の男性にとって、職業への積極的関与は比較的早く達成されるのに対して、家庭生活における親密性の形成は遅延される傾向があることを示している。

また、既婚女性も職業を持つことが一般化している現代社会においては、男性もまた、家庭生活の維持に責任をもち、積極的に関与することが期待される時代になった。「職業と家庭の両立」は、男性にとっても重要なテーマになっているはずであるが、今日ではまだこの問題は、より若い世代を中心とした一部の男性を除いて、多くの男性にとっては、自己のアイデンティティにとって重要な問題として主体的に受けとめられていないのが実情ではなからうか。

こうして社会的、職業的アイデンティティの達成のみで、家族をはじめとする重要な他者との関係性を棚上げにして長い生涯を、少なくとも現役引退期までを過ごしてしまう男性が多いことは事実であろう。会社人間と呼ばれる人々はその典型的な例であろう。このような成人のアイデンティティのあり方は、成熟したアイデンティティとは考えにくく、3.において考察

するように、生活レベルにおいてはさまざまな弊害や問題の背景となっている。今日、パートナーとの関係性を深めること、親になること、子供を世話し育てること、家庭を維持することの重みと、それが自己の成熟にとって重要な意味をもつことの自覚が、男性の側にも一層、求められていると思われる。

3) 中年期・高齢期

成人中期における関係性に関する重要な視点は、Eriksonの個体発達分化の図式の中に示された相互性(mutuality)の概念によみとることができる。Eriksonは、「与えると同時に得る」という相互作用を精神発達の中にとらえようとした。幼児と母親は「育てられる者」と「育てる者」という一方向的な関係ではなく、「育てられると同時に育てる」存在として、発達の観点から人間関係をとらえようとしたのである。つまり、母親が幼児期の心理・社会的課題の達成を援助することが、とりもなおさず自分自身の課題である世代性を達成することになるのである。

この段階に至って我々のライフサイクルは、次の世代と交差することになる。次世代への深い関心なしに行われる生活や社会的行動は、単なる「自己陶醉」にすぎないとErikson(1950)は述べているように、アイデンティティの成熟は、他者への深い関心を通じて獲得されていくのではないであろうか。すなわち自己の獲得したアイデンティティでもって、他者を生かし育ててはじめて、成人としてアイデンティティを達成したといえる。ここに、アイデンティティは新たな広がりや深まりを獲得する。

一方、Franz & White(1985)は、Eriksonの個体発達分化の図式について、つぎのような非常に意義深い提案をしている。彼女らは、成人期の心理・社会的課題である親密性や世代性の発達にとって本質的であると思われる愛着(attachment)の先駆的プロセスについて、これまでのアイデンティティ研究ではほとんど注目されていないことを指摘し、成人期のアイデンティティ発達にとって重要な側面である愛着についての精緻化が必要であると主張している。彼女らは、人間の生涯発達を個体化の発達と愛着の発達という2つの経路で理解しようと試み、表1のような「生涯発達に関する複線モデル」を提唱した。このモデルにおいては、Eriksonの図式の第VI段階「親密性 対 孤独」と第VII段階「世代性 対 自己陶醉」は、愛着の発達経路の方に組み入れられている。個の発達と関係性の発達を同等の価値をもつものにとらえ、両者が相互に影響を及ぼしつつ、アイデンティティが発達していくものにとらえた彼女らの試みは、きわめて示唆的なものである。

表1 Erikson 理論を応用した生涯発達に関する複線 (two-path) モデル

(Franz & White, 1985)

	乳児期	幼児前期	幼児後期	学童期	青年期	成人前期	成人期	老年期
個体化経路	信頼 対 不信	自律性 対 恥と疑惑	自発性 対 罪悪感	勤勉性 対 劣等感	アイデンティティ 対 アイデンティティ 拡散	職業及びライフ・スタイル の模索 対 漂流	ライフ・スタイルの確立 対 空虚	統合性 対 絶望
愛着経路	信頼 対 不信	対象及び自己の恒常性 対 孤独と無力感	遊戯性 対 受身性または攻撃性	共感と協力 対 過度の警戒または権力	相互性・相互依存 対 疎外	親密性 対 孤独	世代性 対 自己陶醉	統合性 対 絶望

また最近、個の確立と関係性の発達というこの2つの人格の特徴を生涯発達の視野のもとでとらえようとした実証的研究が行われるようになった。山本(1989)は、人格の2面性を表2に示したような「関係的自己」(Connected-Self)と「分離した自己」(Separated-Self)の2つの概念でとらえ、加齢とともに両者がともに発達していくことを明らかにしている。

また伊藤(1992)は、「個人志向性」「社会志向性」という概念を用いて、人格の2面性の発達的変化を検討し、図1に示したように年齢とともに両者が上昇していくことを見出している。

これらの研究は、いずれも個の確立と関係性の達成は生涯を通じて進み、両者が共に達成された、つまり両者が統合された状態が成熟した人間の様態であるという認識のもとに、それを実証的に明らかにした点で共通している。これらの研究は、生涯発達における関係性の成熟の重要性を示唆した点で、評価することができると思われる。

表2 「関係的自己」と「分離した自己」の特質(山本, 1989)

<p>「関係的自己」</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 愛着と共感性の発達に基礎づけられ、 2. 他者の欲求・願望を感じ、その満足を目指す反動的行動(思いやり、世話)として現れ、 3. 自己と他者とは互いの具体的な関係の中に埋没し、拘束され、責任を負う存在として把握される。
<p>「分離した自己」</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 分離-個体化の発達に基礎づけられ、 2. 他者の反応や外的統制によらない、自律的行動(積極的自己実現・力の発揮)として現れ、 3. 他者は自己と同等の互いの不可侵の権利をもった存在として、抽象的一般的に把握される。

以上、概観したように、心理学における発達研究においては、関係性の発達・成熟は、人格発達において個の確立と同様、重要な意味をもち、個と関係性の両者が達成され、統合された状態が成熟した人格であると、理論的にはとらえられるようである。この理論的

方向づけは、きわめて妥当なものであろう。しかしながら、青年期以降の長い人生の中で、この両者は必ずしも並行的に同等に発達していくものではない。ともすれば両者がはげしく葛藤する時期や状況も少なくない。あるいは多くの成人男性において見られるように、アイデンティティ形成がその一方を棚上げにして進行していく場合もある。個と関係性の両者を同等の視座においたアイデンティティの生涯発達の研究の今後の方向性として、ライフサイクルの中で両者がどのよう

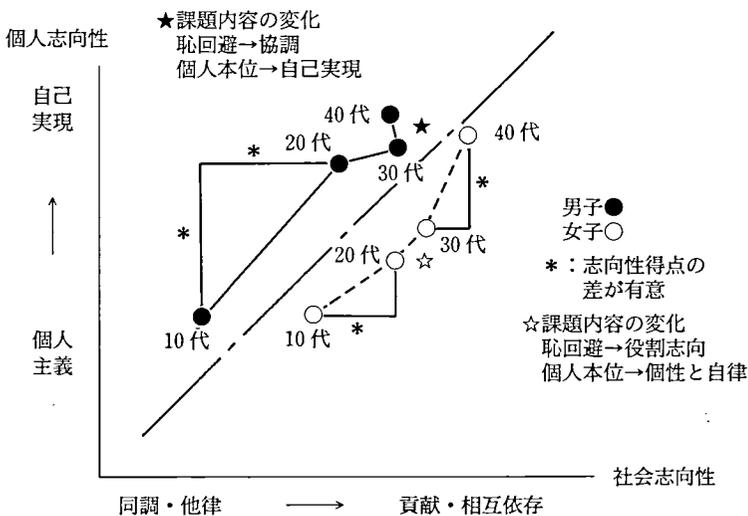


図1 2次元図式から見た志向性の変化過程(伊藤, 1992)

に発達し、展開していくのか、そのライフサイクルの各時期で見られる両者の葛藤と統合のプロセスや、両者の発達を促進、あるいは阻害する要因や状況の考察が重要な課題として考えられる。

一方、現実の生活レベルでは、関係性がうまく達成されない状況は、今日、数多く見られる。ライフサイクルを通して他者の発達を援助しつつ、自分自身も自己実現を達成していくことは、成熟した人間のあり方を示していると思われるが、自己実現の達成と他者の自己実現への援助は、必ずしもいつも折り合うものではない。特に、今日、家族のまとまりの希薄化や家族の「個別化」によって、本来の家族機能が失われつつあるという指摘や、母親役割だけでは個としてのアイデンティティを支えきれないといった問題など、今日、この課題をめぐる葛藤はさまざまな領域で存在している。そこで次に、ライフサイクルの中で見られる個の確立と関係性の達成をめぐる葛藤と統合に関する実際的な問題について考察していきたい。

3. ライフサイクルにおける関係性の達成に見られる実際的な問題

ライフサイクルの中で見られる関係性、特に日常生活・家庭生活における関係性の最も一般的なものは、親子関係と夫婦関係であろう。中でも親子関係は、世代の異なる者同士の長期にわたる密接な関係である。特に親子関係が密接になるのは、子育て期と老親の介護期であり、これは「世話」を通しての関係性となる。この世話を通じての関係性は、Eriksonの相互性の概念によっても示唆されたように、世話される者ばかりでなく、世話する側にも発達・成熟をもたらすものと考えられる。

(1) 子供を育てることと親の側の発達と葛藤

親子関係の研究史はかなり古いですが、柏木(1995)も指摘するように、これまでの親子関係の研究は、多くの場合、子供の発達に焦点化したものであり、子供の側から見た親子関係の研究であった。また、一般に「育児は育自」といわれるように、子育てによって親も成長するといわれていたが、親がどのように成長・変化するのかについては、かなりあいまいにとらえられてきた。この古くて新しい問題について柏木(1995)は、幼児をもつ親との面接および自由記述から具体化して作成した質問紙調査によって、表3のような親となることによる成長・発達に関する6因子を見出している。これらの中には、柔軟性、自己抑制と同時に、自己の明確さ、強さ、視野の広さなど、これまで人格の発達・成熟の概念でとらえられてきたものが含まれている。「また、日頃人々が『人間ができてい』『練れた人』といった言葉で、人格的に優れ、より高い水準にあると判断する時、暗黙の基準としているものが含まれており、『育自』とはこのような人格発達・成熟に至る営みであることが確認された」(柏木, 1995)と考えられる。

しかしながら、今日、育児にかかわる女性が、必ずしもすべ

表3 親となることによる成長・発達一次元得点平均(柏木, 1995)

	項目(主なもの)	父	母	P
第I因子 「柔軟さ」	<ul style="list-style-type: none"> 角が取れて丸くなった 考え方が柔軟になった 他人に対して寛大になった 精神的にタフになった 度量が広がった 	2.40	< 2.83 (0.74) (0.61)	***
第II因子 「自己抑制」	<ul style="list-style-type: none"> 他人の迷惑にならないように心がけるようになった 自分のほしいものなどが我慢できるようになった 他人の立場や気持ちを汲み取るようになった 人との和を大事にするようになった 自分本位の考えや行動をしなくなった 	2.57	< 2.99 (0.72) (0.62)	***
第III因子 「視野の広がり」	<ul style="list-style-type: none"> 日本や世界の将来について関心が増した 環境問題(大気汚染・食品公害など)に関心が増した 児童福祉や教育問題に関心を持つようになった 一人一人がかけがえのない存在だと思えるようになった 日本の政治に関心が増した 	2.21	< 2.60 (0.67) (0.63)	***
第IV因子 「運命・信仰・伝統の受容」	<ul style="list-style-type: none"> 物事を運命だと受け入れるようになった 運や巡り合わせを考えるようになった 長幼の序は大切だと思えるようになった 伝統や文化の大切さを思うようになった 人間の力を超えたものがあることを信じるようになった 	2.71	< 3.12 (0.73) (0.54)	***
第V因子 「生き甲斐・存在感」	<ul style="list-style-type: none"> 生きている張りが増した 長生きしなければと思うようになった 自分がなくてはならない存在だと思えるようになった 子どもへの関心が強くなった 	2.82	< 2.95 (0.57) (0.53)	**
第VI因子 「自己の強さ」	<ul style="list-style-type: none"> 自分の健康に気をつけるようになった 多少他の人と摩擦があっても自分の主義は通すようになった 自分の立場や考えはちゃんと主張しなければと思うようになった 	2.35	< 2.52 (0.69) (0.58)	***

注) ** p<.01 *** p<.001

て安定したアイデンティティを達成し、保持しているわけではないことも、また指摘されている。例えば、育児ノイローゼや幼児虐待は、特殊な母親だけが体験するものではなく、一般的な普通の母親も「子育てはつらい」「我が子がかわいく思えない」などの気持ちをもつことが、日常茶飯にあることは広く知られるようになって来ている（金沢，1993）。

また、大日向（1988）は、昭和初期、昭和20～25年、昭和45年前後の3つの時期に子育てをした女性の育児の意義や育児に対する意識に関する世代間比較を行い、現代女性は、自己の生きがいは母親であることとは別のものとする傾向にあることを見出している。これは今日、空の巣期にある女性ばかりでなく、育児期の女性においてさえ、母親役割だけでは自己のアイデンティティを支えきれないことを示唆するものであろう。このことは、関係性に根差した「母親アイデンティティ」と個の確立にもつづいた「個としてのアイデンティティ」の相克・葛藤を意味している。

一方、母親の育児に対する不安や葛藤は、家族をはじめとして母親をとりまく心理・社会的環境によって大きな相違があることも、また事実である。例えば牧野（1987）は、育児期の女性を対象に、育児不安と社会的な人間関係や夫婦関係の関連性を分析し、育児不安の程度は母親の社会的関係の広さや夫との関係に規定されていることを見出している。

また岡本（1995 b）は、育児期の女性のアイデンティティ様態を、個としてのアイデンティティ達成と母親意識の確立という2つの次元からとらえ、I 統合型、II 伝統的母親型、III 独立的母親型、IV 未熟型という4タイプを見出している。そして、両者が統合された最も成熟したタイプと考えられる統合型の女性は、自分の人生と育児が調和しており、育児によって自分自身が成長してきたことや生きがいになっていることが明確に意識されていた。また、家事、育児に対する夫の実際的な協力度では、I～IVタイプに有意差が見られなかったにもかかわらず、統合型の女性は他型に比べて、夫への信頼感が有意に高く、夫からの理解の程度を最も高く認知していた。このような研究は、女性のアイデンティティ統合や関係的アイデンティティの達成に家族をはじめとする他者のサポートが重要な意味をもつことを示唆するものであろう。

(2) 高齢者、特に老親の介護と介護する側の発達と葛藤

ライフサイクルの中で、もう一つの重要な世話を通しての関係性が、高齢期、特に老親の介護期において見られる。高齢者の介護も、子育てと同様、単に「介

護する者」と「介護される者」という一方向的な関係ではなく、高齢者の世話を通じて介護する側も多くを学び、成長・発達する関係であるはずである。柏木（1995）が見出した親となることによる成長・発達に関する因子である「柔軟さ」「自己抑制」「視野の広がり」「運命・信仰・伝統の受容」「生きがい・存在感」「自己の強さ」はいずれも、介護体験を通じても獲得される特質であるように思われる。また、ボランティアとして高齢者介護を行った青年の体験報告などからも、高齢者の世話を通じて、高齢者を共感的に理解することが、「受容し受容される」関係を形成し、青年に多くの活力を与えることが示唆されている（岡本，他，1994）。これらの問題についての実証的研究が待たれるところである。

しかし現実的には、介護者の成長・発達というポジティブな側面よりも、介護ストレス等のネガティブな側面のみが目目され、強調されているように思われる。実際、介護者の担う心身の負担は、改めて記すまでもない。おそらく、子育て期以上に介護期は関係性の実践・達成が困難であり、個としての自己が圧倒されてしまうことが多いのが現状であろう。

Skaff & Pearlin（1992）は、介護とストレスの関係を調査し、介護において①介護者の役割に「封じ込み閉止」（role engulfment）がおこること、②介護者が自己喪失の体験をすることについて言及している。介護者は介護すると同時に、社会人として社会生活を送っている。しかし徐々にその生活に制限が加えられ、社会的活動をはじめ、知人友人との接触も極度に減少し限定されていく。結局、「介護者であること」が介護活動のみに封じ込まれてしまう結果となり、他の役割を閉止せざるを得なくなる。自己の存在に対して外部からの認知や評価が得られなくなり、だんだん他者から孤立していく。その上、介護体験から受ける衝撃によってその孤立感を増幅されることになる。このような状態は、介護役割によって個としてのアイデンティティが喪失してしまうことを意味している。

(3) 関係性の鍵概念としての「世話」（Care）

—世話役割はアイデンティティの支えにならないのか—

関係性の発達にとって「世話」は重要な媒体であり、実践的、理念的鍵概念であると考えられる。しかしながら、以上のような生活レベルに見られる諸状況を検討すると、世話役割はアイデンティティの支えになりにくいことが推察される。それどころか、上に述べたように世話役割の遂行によって、個としてのアイデンティティが喪失してしまう事態も少なくない。

子育てにせよ、高齢者介護にせよ、世話する仕事や

役割が、なぜネガティブな側面が強調される困難な仕事であるかについては、いくつかの要因が考えられる。第1は、長時間労働による疲労、他の活動を制限されることによる欲求不満、生存に関与する緊張感など世話する仕事そのものの特性である。第2は、世話される側である子供や老親の要因として、体質や病気、扱いにくさなどへの心配や困難さが考えられる。第3は、世話する側の要因として、母親や介護者の健康状態、神経質や不安を感じやすいなどの性格、対人関係能力、家族関係、育児や介護に関する知識、育児・介護観、人生観などの影響があげられる。第4として、核家族化にともなう家族内の潜在的サポート力の低下や、母親1人、妻または娘1人に負担が集中するなど、社会・文化的要因が考えられる。しかも、育児も介護も、結果の出にくい(したがって評価されにくい)、きわめてファジィな仕事であるため、西欧的な課題達成志向的、目的追求的な価値観にはそぐわないとも言える。このような世話にともなう実際の負担が、関係性の発達を阻んでいるとも考えられる。

また生活レベルで見た時、世話役割がアイデンティティの支えになりにくいこと、さらには一般社会において、世話することの意義や価値の認識が浅いことの一因として、心理学研究に「生活」の視点が欠けていたことがあげられるのではないであろうか。生活的自立は、表層的なこととして、心理学的関心の対象になることは少なく、人間にとってより本質的な主体的自己確立の中に取り込まれ、見逃されてきた。しかし現実には、生活身の自立ができない青年や成人、特に男性は数多く、このことが関係性発達の重要な実践的、理念的鍵である「世話」に対する認識を滞らせてきたと考えられる。

渡邊(1994)によれば、我国における男性の家事・育児・介護の分担率は、妻が有職か否かにかかわらず諸外国に比べて著しく低く、既婚男性は妻に、独身で親と同居している男性は母親に、独身の一人暮らしの男性は代替サービス産業に依存している。生活身の自立能力は、家族との別居や死別、病気や障害などの「危機を乗り越える力となるばかりでなく、他者への思いやりや感謝の心につながる。日常の食事作りを考えてみても、その計画、買い物、料理、後片付けは容易ではないからである。共働きの妻が仕事・家事・育児で、専業主婦が家事・育児、さらに介護で過重負担になっても、自分が分担するなど思いもつかず、ねぎらいの言葉一つかけない夫の多くは、それまで生活身の自立で母親や妻に依存し、自分ではやったことがなく、その大変さが実感できないからである。(中略)さらに、高齢になり体が不自由になった場合でも、可能な

限り生活身のことを自分ですること、自分でやれるように支援することが、その人やその子供の喜びや生きる力になっている」(渡邊, 1995)。このように、生活身の自立能力は、人間がライフサイクルを通じて自己実現を達成していくための基本的な力である。

4. 今後の課題—実践レベルにおける個の確立と関係性の達成の統合へ向けて—

2. で述べたような理論的、研究的レベルにおいてのみならず、実践的レベルにおいても、個の確立と関係性の発達の両者を統合するようなヴィジョンを構築することはきわめて重要であろう。個を大切にしながらの世話役割の実践、個としてのアイデンティティを達成しながら他者の自己実現をも援助していくことは、精神的健康や精神的充足感、幸福感、そしてアイデンティティ発達という、どの側面から見ても、最も望ましいことであると思われる。これを実現させるためには、世話役割にともなう心身の負担や時間的拘束という物理的な困難さが、個としてのアイデンティティや個人の愛情まで圧倒してしまわないための方策を考える必要がある。そのためには、真の世話(care)を可能にする統合されたヴィジョンが求められる。そこには、他者の自己実現への援助を可能にするための理念から、男女を問わず、日常生活における世話が実際にできるという具体的な技術のレベルに至るまでの総合的な視点と、家族による世話と専門家や施設など家族外の社会の手による世話の内容、および相互の連関が示されなければならない。

Finch & Groves(1983)による、愛情の表現として女性が家族の世話をする行為についての考察は、この問題について非常に多くの示唆を与えている。“care”という言葉には、「人の面倒を見ること」と「人を慈しみ、愛すること」という2つの意味が含まれている。つまり、英語ではだれかの世話をするを“care for someone”と言い、だれかのことを思いやるを“care about someone”と表現する。Finchらは、女性は長い間、社会的にこの行為が同じものと見なされてきたため、愛する者の面倒をみるよう強制されてきたと主張している。個を大切にしながらの世話役割の実践には、“care about”という心理的な愛情や配慮においては、世話される者の身近な者を中心に、そして“care for”という面倒を見る次元においては、社会や専門家を含めたネットワークをも広く導入した方式が適切であろうと思われる。

「世話」の理念の構築には、今後の研究と教育に負

うところも、また大きいであろう。これまで多くの母親を圧迫、拘束してきた母性神話や三才児神話も、幼児心理学や発達心理学の研究によって誤りであることが指摘されるようになった（例えば、Bronfenbrenner, Alvarez & Henderson, 1984; 大日向, 1988）ように、科学的研究の裏付けをもった世話の価値と意義が提唱されることが重要であろう。このような基礎研究は、子供の発達に不可欠な母性的世話の質と量は何か、子供の特徴や環境の個人差をふまえた研究へとさらに発展していく必要であろう。同様に、高齢者にとっても、心身の健康や精神的充足感、さらには自己実現の達成のために不可欠な世話や関係性とは何かという問題も、具体的に明らかにしていく必要がある。その萌芽的研究は、いくつか試みられつつある（岡本, 1995 a; 原田・岡本, 1995）が、今後の研究に負うところが大きいであろう。

また、ライフサイクルを通して見た時、我々は男女を問わず、1人残らず世話し、世話される存在であるということを再認識する必要がある。そして世話する立場に立った時には、身体的世話から心理的愛情や配慮まで、すべてを担うことが、他者への愛情の深さであるという、今日まで多くの女性がとらわれてきた一種の呪縛から解放される必要がある。さらに、すでにみてきたように、世話役割はけっして、ポジティブな側面ばかりではなく、数多くの負担をともなうネガティブな側面をも内包するものである。その負担感やネガティブな感情を意識し、表出することは、決して異常で冷淡だからではなく、ごく普通の自然のことであるという認識をもつことも重要であろう。その感情体験を認識し、表出することによって、本来の自己感覚が回復していくことは、幼児虐待をする母親のカウンセリング実践などによっても示唆されているところである。

本稿では、成人期の発達における関係性の重要性和、世話を通しての関係性に見られる実際的问题を検討し、真の共生関係の構築に向けてのヴィジョンについて考察した。成人期におけるもう1つの重要な関係性に夫婦関係がある。これは、親子関係とは異なって、本来、自立した個と個の共生関係であるはずである。しかしながら、現実的には世話する妻と世話される夫という硬直した関係の夫婦が多いことは、よく指摘されることである。夫婦の成熟した共生関係についても重要な課題であるが、この問題についてはまた別の機会に論じることにはしたい。

注

- 1) Mahler(1975)の理論における「共生(symbiosis)」は、発達のごく早期の段階の乳児に見られる母親との身体精神的融合を示し、本稿のテーマである個人の自立を前提とした成人期の「共生関係」とは別の概念である。

引用文献

- Bakan,D. 1966 *The duality of human existence*. Boston: Beacon Press.
- Bem,S.L. 1974 Theory and measurement of androgyny. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 1047-1054.
- Blos,P. 1967 *On adolescence*. New York: Free Press.
- Bowlby,J. 1969 *Attachment and loss*,Vol.1. London: Hogarth Press. (黒田実郎 訳 1976 母子関係の理論 ①愛着行動 岩崎学術出版社)
- Bronfenbrenner,U.,Alvarez,M.F.& Henderson,Jr.,C. R. 1984 Working and watching: Maternal employment status and parents' perceptions of their three-year-old children. *Child Development*, 55, 1362-1378.
- Chodorow,N. 1978 *The reproduction of mothering*. Berkley: University of California Press. (大塚美津子 訳 1981 母親業の再生産 新曜社)
- Erikson,E.H. 1950 *Childhood and society*. New York: W.W.Norton. (仁科弥生 訳 1977・1980 幼児期と社会 みすず書房)
- Finch,J.& Groves,D. 1983 *A labour of love: Women, work and caring*. London: Routledge, Kegan and Paul.
- Franz,C.E.& White,K.M. 1985 Individuation and attachment in personality development: Extending Erikson's theory. *Journal of Personality*, 53, 224-256.
- Gilligan,C. 1979 *In a different voice*. Boston: Harvard University Press. (岩男寿美子 訳 1986 もうひとつの声 川島書店)
- 原田圭子・岡本祐子 1995 高齢期における精神的充足感形成に関する研究(第2報): 家族役割の検討. 日本家政学会誌, 46, 10, 933~940.
- Hodgson,J.W.& Fisher,J.L. 1979 Sex differences in identity and intimacy development in college youth. *Journal of Youth and Adolescence*, 8,

- 伊藤美奈子 1992 個人志向性・社会志向性に関する発達の研究, 教育心理学研究, 41, 293-301.
- Josselson, R.L. 1973 Psychodynamic aspects of identity formation in college women. *Journal of Youth and Adolescence*, 2, 3-52.
- Jung, C.G. 1951 Aion: Untersuchungen zur Symbolgeschichte. (English translation, In J.Campbell (Ed.) 1976 *The portable Jung*. New York: Penguin Books, Pp.139-162.)
- 金沢佳子 1993 わが子がかわいく思えない 日本放送出版協会.
- 柏木恵子 1995 親子関係の研究. 柏木恵子・高橋恵子 (編) 発達心理学とフェミニズム ミネルヴァ書房, Pp.18-52.
- Mahler, M.S. 1975 *The psychological birth of the human infant*. New York: Basic Press. (高橋雅士訳 1983 乳幼児の心理的誕生 黎明書房)
- 牧野カツコ 1987 共働き女性の精神病理. 稲村博 (編) 女30代にして惑う. 現代のエスプリ, 236, 173-183, 至文堂.
- 松井洋 1992 愛他行動の発達と形成. 東洋 (編) 発達心理学ハンドブック 福村出版, Pp.814-818.
- Miller, J.B. 1976 *Toward a new psychology of women*. Boston: Beacon Press.
- O'Connell, A.N. 1976 The relationship between life style and identity synthesis and resynthesis in traditional, neotraditional, and nontraditional women. *Journal of Personality*, 44, 675-688.
- 岡本祐子・福田公子, 他 1994 高齢化社会に関する家庭科授業の実践的研究II: 発展学習にみられる福祉思想と共感的理解. 広島大学教育学部学部・附属共同研究体制研究紀要, 22, 137-146.
- 岡本祐子 1995 a 高齢期における精神的充足感形成に関する研究(第1報): 高齢者の精神的充足感獲得と生活の満足度および主体的欲求との関連性. 日本家政学会誌, 46, 10, 923-932.
- 岡本祐子 1995 b 育児期における女性のアイデンティティ様態と家族関係に関する研究 (投稿中)
- 大日向雅美 1988 母性の研究 川島書店.
- Parsons, T. 1955 Family structures and the socialization of the child. In T.Parsons & R.F. Bales (Eds.) *Family, Socialization and the Interaction Process*. New York: Free Press.
- 斎藤久美子 1990 青年期後期と若い成人期-女性を中心に- 小川捷之・斎藤久美子・鏑幹八郎 (編) 臨床心理学体系 第3巻 ライフサイクル 金子書房, Pp.163-176.
- Skaff, M.& Pearlin, L. 1992 Caregiving: Role engulfment and the loss of self. *The Gerontologist*, 32, 656-664.
- 渡邊恵子 1994 自立と自己の性の受容(2): 性差の検討. 日本女子大学紀要: 人間社会学部, 3, 1-14.
- 渡邊恵子 1995 自立再考-女性の自立・男性の自立- 柏木恵子・高橋恵子 (編) 発達心理学とフェミニズム ミネルヴァ書房, Pp.77-101.
- 山本里花 1989 「自己」の二面性に関する一研究: 青年期から成人期にかけての発達傾向と性差の検討. 教育心理学研究, 37, 302-311.